



演者の出身地からみた現代漫才 : 『M-1 グランプリ』決勝コンビの分析

著者	日高 水穂
雑誌名	國文學
巻	107
ページ	188-169
発行年	2023-03-01
URL	http://doi.org/10.32286/00028041

演者の出身地からみた現代漫才

— 『M-1 グランプリ』 決勝コンビの分析 —

日 高 水 穂

1. はじめに

二人の演者のことばの掛け合いによって展開する「しゃべくり漫才」は、昭和初期に大阪の寄席で活躍した横山エンタツ・花菱アチャコを創始者とする。エンタツとの出会いによって漫才作者の道を歩み、「上方漫才の父」と称されるようになった秋田実（1905-1977）は、漫才が大阪で生まれた経緯について以下のように述べる。

漫才は、今日までに七十余年の歴史を持っているが、元はと言えば音頭を中心に舞台と客席とが一つに融け合った猥雑な雰囲気の中から生れてきた小さな楽しみの芽であった。それが大阪という土壌の中で育ち、一つの花が開いたのである。

今の勢いでは、まだまだ色々の花が開きそうな気がする。

数年前に、

（大阪の人間が二人寄れば漫才になる）

そういう言葉が流行ったことがある。しかし、これは本当は逆で、漫才の方が大阪の人間が二人寄った時の話の面白さを映しているのである。映すことができたのは、漫才の二人もまた大阪の人間だったからである。

（秋田 1975：248-249）

秋田はまた、「大阪の漫才の面白さは、同じ大阪の人間同士がしている世間話の味であり、大阪の人間の暮らしの底にある面白さで、その一つが大阪弁である」としたうえで、「大阪弁が大阪の漫才の面白さの総てではなく、大半の漫才の面白さは大阪的な考え方や大阪的な暮らし方からきていると思う」とも述べている（秋田 1975：242-243）。

「大阪弁」（関西方言）に「お笑い」のイメージが色濃いのは、漫才を通じて全国

に広まった大抵的（関西的）なコミュニケーション手法が、非関西圏においては異質なものとして受け止められたことを意味するだろう。一方で、漫才は大阪で生み出された当初から東京演芸界への進出を試み続け、1980年代初頭のマンザイブーム¹⁾と2000年代以降の『M-1グランプリ』（ABCテレビ制作・テレビ朝日系）²⁾によって、いまや全国的に受け入れられるものとなった。それに応じて、「めっちゃ」「なんでやねん」「知らんけど」など、関西方言由来のフレーズが全国的に使用される状況も生じている（樋水兼貴 2021 参照）。

現在、漫才は「お笑い」のコンテンツとして全国的に享受されるだけでなく、担い手である漫才師にも非関西出身者が増えてきている。こうした非関西出身者による漫才はどのようなことばによって演じられ、関西出身者の漫才とはどのような違いがあるのか。演者の出身地とことばという観点から、現代漫才をみていきたい。

2. 漫才コンビの出身地と活動拠点

2000年代以降、全国的な知名度を持つ漫才コンビの多くは、『M-1グランプリ』決勝に出場することにより、その地位を確立してきた。『M-1グランプリ』は、新しいスター漫才師を生み出すと同時に、新しい漫才の型を提示し、周知させる装置ともなっている。そうした現状から、本稿では『M-1グランプリ』決勝出場コンビを、現代漫才の担い手の代表として扱う。

まず、『M-1グランプリ』決勝出場コンビの出身地と活動拠点を見ていく。ここで対象とするのは、2001～2022年の決勝大会（2011～2014年は非開催）に出場した計86組のコンビである³⁾。コンビの両方が関西出身者であるものを〈関西コンビ〉、コンビの一方が関西出身者で一方が非関西出身者であるものを〈関西・非関西コンビ〉、コンビの両方が非関西出身者であるものを〈非関西コンビ〉とし、コンビ結成時の所属プロダクションの所在地を活動拠点⁴⁾として整理したものが表1である。なお、コンビの配列は初出場年と当該大会での登場順によっている。また、各大会の出場コンビの出身地の変遷を図1に示す（日高水穂 2022 参照）。

ここで出身地と活動拠点の関係について補足しておく。本稿では「関西」の範囲を近畿2府5県とするが、これは京阪式アクセントが行われ、断定助動詞や、動詞否定辞ヘン、「のだ」相当表現ネンなどの近畿中央部（大阪）方言に特徴的な語法を受容している範囲である。「漫才らしさ」の指標の一つが「大阪弁」であるとすると、関西方言をネイティブの話者として使用するかどうかは、演者の属性として

重要な要素となる。

また、活動拠点は演者がネタ中に使用することばに影響すると考えられる。たとえば、ともに岡山県出身の千鳥とウエストランドは、いずれも地元の友人同士で結成したコンビであるが、大阪拠点の千鳥がネタ中に（関西方言混じりの）岡山方言を織り交ぜることがあるのに対して、東京拠点のウエストランドのネタ中のことばには、西日本方言の特徴は見られない⁵⁾。

表1 『M-1 グランプリ』(2001～2022年) 決勝コンビの出身地

<p>関西 コンビ</p>	<p>【大阪拠点】 中川家／フットボールアワー／チュートリアル／アメリカザリガニ／キングコング／麒麟／ますだおかだ／ハリガネロック／笑い飯／2丁拳銃／りあるキッズ／アジアン／ブラックマヨネーズ／変ホ長調／ライセンス／ダイアン／モンスターエンジン／NON STYLE／カナリア／ジャルジャル／銀シャリ／アキナ／さらば青春の光／さや香／ミキ／ギャロップ／霜降り明星／すぬひろがりず／ミルクボーイ／インディアンズ／カベポスター／男性ブランコ</p> <p>【東京拠点】 DonDokoDon</p>
<p>関西・ 非関西 コンビ</p>	<p>【大阪拠点】 南海キャンディーズ／スーパーマラドーナ／和牛／かまいたち／見取り図／もも</p> <p>【東京拠点】 テツ and トモ／ザブングル／ピース／相席スタート／ゆにばーす／ニューヨーク／おいでやすこが</p>
<p>非関西 コンビ</p>	<p>【大阪拠点】 千鳥／とろサーモン／からし蓮根／ロングコートダディ</p> <p>【東京拠点】 おぎやはぎ／ダイノジ／スピードワゴン／アンタッチャブル／タカアンドトシ／東京ダイナマイト／トータルテンボス／POISON GIRL BAND／品川庄司／タイムマシーン3号／ハリセンボン／サンドウィッチマン／ナイツ／U字工事／ザ・パンチ／オードリー／ハライチ／パンクブーブー／スリムクラブ／メイプル超合金／馬鹿よ貴方は／トレンディエンジェル／カミナリ／マヂカルラブリー／トム・ブラウン／オズワルド／ぺこば／東京ホテイソン／錦鯉／ウエストランド／モグラライダー／ランジャタイ／真空ジェシカ／ヨネダ2000／ダイヤモンド／キュウ</p>

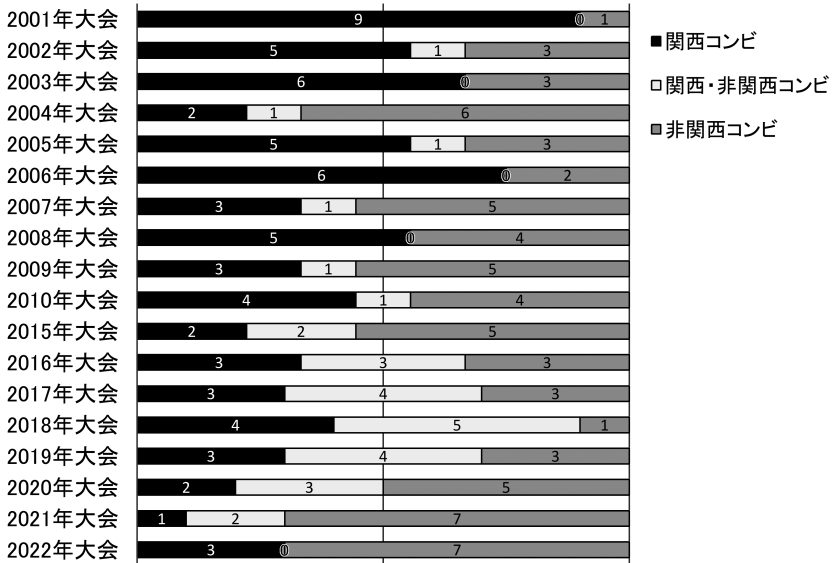


図1 『M-1 グランプリ』(2001～2022年) 決勝出場コンビの出身地

表1によれば、一見してわかるように、活動拠点が大阪であるコンビには〈関西コンビ〉が多く、活動拠点が東京であるコンビには〈非関西コンビ〉が多い。また、図1を見ると、2000年代前半は〈関西コンビ〉が多かったが、2000年代後半には〈非関西コンビ〉が増え、2015年以降は〈関西・非関西コンビ〉も増えている。結果的に〈関西コンビ〉の割合は減る傾向にあるが、これは漫才文化が関西圏を越えて全国に受け入れられるものとなったことを意味するだろう。

3. 漫才コンビの出身地と漫才の型

漫才が舞台芸の中でも言語変種の選択において特殊であるのは、その由来が「大阪の人間同士がしている世間話」の面白さにあることによる。演劇やコントのように、演者が演者自身ではない「仮想キャラクター」を演じる場合は、その役に合わせた言語変種を使用することになるのに対し、漫談などの一人芸の場合、演者は「本人キャラクター」として、観客に向けて語りかけるための言語変種（共通語の丁寧体）を選択する。落語はマクラ（導入）の部分で「本人キャラクター」として観客に向けて語りかけ、ネタ（本題）の部分で一人複数役の「仮想キャラクター」に扮

して演じる芸である。一方、漫才の場合、二人の演者は「本人キャラクター」として舞台上に登場し、対相方発話を展開するため、演者自身が普段の日常会話（親しい人とのくだけた雑談場面）で使っていることばをさらけ出す必要がある。

このとき、演者同士が同じ地域の方言の使い手であれば、より自然な「日常会話」感を生み出すことができるが、その一方で、舞台芸として成立するためには、それが観客にわかることばである必要もある。したがって、現代漫才の多くは、共通語か、漫才を通じて全国に通用するようになった関西方言で演じられることになるのだが、関西方言が共通語に比べてよりリアルな「日常会話」感を生み出し得るのは、それが「方言」（特定地域の話しことば）であることによる強みであろう。共通語は、関東方言を基盤にしたことばではあるものの、全国的に見れば「特徴のない台詞っぽいことば」に聞こえてしまい、リアルな「日常会話」感を生み出す躍動感に欠けるのである。

では、関西方言以外の方言使用についてはどうか。『M-1 グランプリ』決勝出場コンビにも、先に挙げた岡山県出身の千鳥の他に、栃木県出身のU字工事、沖縄県出身のスリムクラブ、茨城県出身のカミナリ、熊本県出身のからし蓮根のように、〈非関西コンビ〉で地元の方言を使うコンビがある。これらのコンビの方言使用はリアルな「日常会話」感を生み出し、さらにコンビの個性ともなっているが、その結果、岡山方言の漫才コンビと云えば千鳥、栃木方言の漫才コンビと云えばU字工事といった連想が強く働き、岡山方言や栃木方言を使う別のコンビが生まれにくい状況になっている。現状では、関西方言以外の方言は、特定のコンビを特徴づける「役割語」（金水敏 2003）的な機能を果たすものとして認識され、漫才の日常会話性を高める普遍性のある言語変種とはなっていないのである。

ここで、演者の出身地と漫才談話の型の関係について見ておきたい。日高（2022）では、発話方向によって漫才談話を以下のように分類した。

対話型：対相方発話の掛け合いによって展開する談話。

演説型：対聴衆発話によって展開する談話。

漫談類：演者の両方が観客に向けて語りかけるもの。

実況類：演者の一方が役に入り一方が観客に向けてその様子を実況するもの。

「演説型」は対相方発話を行わない（対相方発話を織り交ぜることもあるが積極的には行わない）型であり、丁寧体の対聴衆発話が中心になるため、発話に日常会

話性の高さは求められない。

「演説型」のうち「漫談類」は旧来から見られる型であるが、これを手がけるコンビは、〈関西コンビ〉ではますだおかだ（ともに大阪府）、ハリガネロック（ボケ：大阪府／ツッコミ：奈良県）、アジアン（大阪府／兵庫県）、〈非関西コンビ〉ではナイツ（ともに千葉県）、U字工事（ともに栃木県）、オードリー（埼玉県／東京都）、ハライチ（ともに埼玉県）である。出身地による差はないように見えるが、オードリーはボケ役の唐突な発言に対してツッコミ役が軽いなしながら観客に向けて語りかけるネタ運びをし、ハライチはボケ役の練り出す「お題」のフレーズにツッコミ役が答えていく大喜利タイプのネタ運びをしており、いずれもボケ役の発話には日常会話性が認められない。〈非関西コンビ〉の「漫談類」の演じ方がこのように変則的であるのは、非関西出身者には、日常会話性をそぎ落とすことによって生まれる「笑い」への志向があることを示唆しているだろう。

「演説型」のうち「実況類」は相対的に新しい型であるが、これを手がけるコンビは、〈関西コンビ〉では麒麟（京都府／大阪府）、霜降り明星（ともに大阪府）、〈関西・非関西コンビ〉では、南海キャンディーズ⁶⁾（大阪府／千葉県）、スーパーマラドーナ（大阪府／愛媛県）、ニューヨーク（山梨県／三重県）、おいでやすこが（福岡県／京都府）、〈非関西コンビ〉ではスピードワゴン⁷⁾（ともに愛知県）、マヂカルラブリー（神奈川県／愛知県）、トム・ブラウン（ともに北海道）、ぺこば（神奈川県／山口県）、ランジャタイ（富山県／鳥取県）、真空ジェシカ（埼玉県／神奈川県）、錦鯉（北海道／東京都）、ヨネダ 2000（東京都／神奈川県）というように、非関西出身者を含むコンビに多い。〈関西コンビ〉の麒麟と霜降り明星は、関西方言による「対話型」の掛け合いの中に「実況類」を織り交ぜるネタ運びをしているが、それ以外のコンビは、「対話型」の掛け合い部分が非常に少ない（スーパーマラドーナ、ニューヨーク、おいでやすこが、マヂカルラブリー、ランジャタイ、真空ジェシカ、ヨネダ 2000）か、演者（の一方もしくは両方）が非日常的なキャラクター性を帯びている（スピードワゴン、南海キャンディーズ、トム・ブラウン、ぺこば、錦鯉）。

「実況類」は演者の一方が役（仮想キャラクター）に入り、一方がそれを観察する立場で状況説明や感想を述べていくもので、丁寧体の対聴衆発話のみならず、普通体の心内発話が発せられる場合もある。そこには、日常会話性はまったく認められず、日常会話の延長に成立する「対話型」の「しゃべくり漫才」とは相当に異質なものとなっているが、こうした演じ方を非関西出身者が取り入れるのは、関西方言による掛け合いを武器にできないことの裏返しでもあるだろう。

表2には、歴代優勝コンビの出身地と基調方言（「本人キャラクター」として対相手発話で用いることば）、優勝した大会で演じた決勝1本目のネタの漫才の型を示した。漫才のネタの中には、演者の両方が「本人キャラクター」のまま展開するものと、途中で演者の一方もしくは両方が「仮想キャラクター」に扮して展開するものがあるが、前者を「H（本人キャラ）」、後者を「K（仮想キャラ）」とする。

表2 「M-1 グランプリ」優勝コンビの出身地と漫才の型

開催年	コンビ名	活動拠点	漫才の型	上：ボケ役 下：ツッコミ役	出身地	基調方言
2001年	中川家	大阪	対話型H	剛	大阪府	関西方言
				礼二	大阪府	関西方言
2002年	ますだおかだ	大阪	漫談類H	増田英彦	大阪府	関西方言
				岡田圭右	大阪府	関西方言
2003年	フットボールアワー	大阪	対話型K	岩尾望	大阪府	関西方言
				後藤輝基	大阪府	関西方言
2004年	アンタッチャブル	東京	対話型K	山崎弘也	埼玉県	共通語
				柴田英嗣	静岡県	共通語
2005年	ブラックマヨネーズ	大阪	対話型H	吉田敬	京都府	関西方言
				小杉竜一	京都府	関西方言
2006年	チュートリアル	大阪	対話型H	徳井義実	京都府	関西方言
				福田充徳	京都府	関西方言
2007年	サンドウィッチマン	東京	対話型K	富澤たけし	宮城県	共通語
				伊達みきお	宮城県	共通語
2008年	NON STYLE	大阪	対話型H	石田明	大阪府	関西方言
				井上裕介	大阪府	関西方言
2009年	パンクブーブー	東京	対話型K	佐藤哲夫	大分県	共通語
				黒瀬純	福岡県	共通語
2010年	笑い飯	大阪	対話型K	哲夫	奈良県	関西方言
				西田幸治	奈良県	関西方言
2015年	トレンディエンジェル	東京	対話型H	斎藤司	神奈川県	共通語
				たかし	東京都	共通語
2016年	銀シャリ	大阪	対話型H	鰻和弘	大阪府	関西方言
				橋本直	兵庫県	関西方言
2017年	とろサーモン	大阪	対話型K	久保田かずのぶ	宮崎県	関西方言
				村田秀亮	宮崎県	関西方言
2018年	霜降り明星	大阪	実況類K	せいや	大阪府	関西方言
				粗品	大阪府	関西方言

2019年	ミルクボーイ	大阪	対話型H	駒場孝	大阪府	関西方言
				内海崇	兵庫県	関西方言
2020年	マヂカルラブリー	東京	実況類K	野田クリスタル	神奈川県	共通語
				村上	愛知県	共通語
2021年	錦鯉	東京	実況類H	長谷川雅紀	北海道	共通語
				渡辺隆	東京都	共通語
2022年	ウエストランド	東京	対話型H	河本太	岡山県	共通語
				井口浩之	岡山県	共通語

「対話型H(本人キャラ)」のネタを手がけるのは、〈関西コンビ〉では中川家、ブラックマヨネーズ、チュートリアル、NON STYLE、銀シャリ、ミルクボーイ、〈非関西コンビ〉ではトレンディエンジェル、ウエストランドで〈関西コンビ〉が多い。また、「対話型K(仮想キャラ)」のネタを手がけるのは、〈関西コンビ〉ではフットボールアワー、笑い飯、〈非関西コンビ〉ではアンタッチャブル、サンドウィッチマン、パンクブーブー、とろサーモンで〈非関西コンビ〉が多い。「仮想キャラクター」は、必ずしも演者自身の日常会話のことばを使うわけではなく、会話自体も「台詞」的に発せられるため、やはり関西方言による掛け合いを武器にできない演者にとっての活路になるものと思われる。こうした傾向について、ナイツの埴宣之氏(千葉県)は、以下のように指摘している。

第一期(筆者注:2001~2010年大会のこと)において優勝した非関西系のコンビには、一つの共通点があります。(中略)04年のアンタッチャブルも、07年のサンドウィッチマンも、09年のパンクブーブーも、コント漫才なんです。

コント漫才はツッコミとボケだけの直線的な関係性に陥りがちなので、お客さんを含む三角形はつくりにくい。それ以外にも、ミスをしたときに修正しにくい、人間性を出しにくい等々、さまざまなハンディがあります。

その一方で、関東芸人からすると、言葉のハンディがだいぶ軽減されます。しゃべくり漫才と違って、そもそも作り物という設定なので「漫才とはこうあるべき」という固定観念から自由だし、関東言葉の不利さもさほど気にならない。(埴2019:141)

こうして見ていくと、日常会話性の高い掛け合いがもっとも行われやすいのが「対話型H(本人キャラ)」であり、関西方言の掛け合いが活かされやすい(その一方で「新

しい笑い」を生み出すことが困難な)漫才の典型であると言える。非関西出身者は、「対話型K(仮想キャラ)」や「実況類」のような、ネタのストーリー性や演者のキャラクター性に重きを置く型を採用することで、日常会話性の高い掛け合いに依存しない「笑い」の創造を試みているものと思われる。

4. 漫才コンビの出身地とことば

ここで、漫才コンビの出身地ごとに、『M-1 グランプリ』優勝コンビの漫才談話を見てみよう。

漫才談話の冒頭部分は、あいさつ・自己紹介・つかみパフォーマンス(ネタに入る前に行われる短いパフォーマンス)などから成る〈開始部〉から〈主要部〉(ネタ)へと展開する(日高水穂 2018・2019)。〈完成期〉以降の漫才の特徴として、対聴衆発話は丁寧体、対相手発話は普通体に切り換えることが定着しているが(日高水穂 2020)、漫才談話の冒頭部分では多くの場合、「本人キャラクター」として発する対聴衆発話から対相手発話への切り替えが起きる。

日常会話性の高い掛け合いは、「本人キャラクター」として発する対相手発話に現れやすいものであるため、以下では「対話型」の漫才談話の冒頭部分を中心に、漫才コンビの出身地ごとに、言語変種の選択を見ていく。丁寧体には二重下線、普通体には一重下線を付し、関西方言的な言語形式は太字で示す。

4.1 〈関西コンビ〉の漫才談話

まず、〈関西コンビ〉の例として、中川家とミルクボーイの〈主要部〉冒頭部分を見てみる。

(1) 中川家「M-1 グランプリ 2001 決勝 1 回戦」(資料 01)

礼二：まあ言うてもね、まあ最近、ちまたでは危険なことが多いですから、

剛：多いですよ。

礼二：皆さん、気つけてくださいよ、ほんとに。

剛：気つけてくださいよ、ほんまに。

礼二：まあ、特にね、電車なんか乗ってますと、ホームですわ。ねえ、駅員さんがよう言うてますやん。(駅員の口調で)「駆け込み乗車おやめください。」あれ、よう言うてる。

剛：(駅員の口調を真似て)「駆け込み乗車……。」

礼二：何をやろうと思てんの。勝手にやらんでええねん。〈ツッコミ〉

剛：やらしてくれよ、俺かて。

(2) ミルクボーイ「M-1 グランプリ 2019 決勝 1 回戦」(資料 15)

駒場：うちのおかんがね、好きな朝御飯があるらしいんやけど。

内海：ああ、そうなんや。

駒場：その名前をちょっと忘れたらしくてね。

内海：朝御飯の名前忘れてもうてえ、どうなつてんねん、それ。〈ツッコミ〉

駒場：いろいろ聞くんやけどな、全然分からへんのやな。

内海：分からへんの。

駒場：おお。

内海：いや、ほな、俺がね、おかんの好きな朝御飯、一緒に考えてあげるから、どんな特徴を言うてたか、教えてみてよ。

中川家は、丁寧体にも方言を交えながら普通体の発話に移行しつつ、対相方発話に切り替えている。ミルクボーイは、挨拶とつかみパフォーマンスを終えると即、上記の普通体の対相方発話に切り替えている。いずれも、関西方言の普通体の表現を用いることで、明確な形で対相方発話への切り替えを行っている。

「対話型K(仮想キャラ)」のネタ運びをするフットボールアワーは、〈主要部〉冒頭の導入部分を中川家の(1)と同様に、方言混じりの丁寧体から普通体の発話に移行しつつ対相方発話に切り替え、さらに「結婚記者会見」というコント設定のレポーター(仮想キャラクター・岩尾)と芸能人(本人キャラクター・後藤)の会話を丁寧体に切り替えて展開している。

(3) フットボールアワー「M-1 グランプリ 2003 決勝 1 回戦」(資料 03)

【主要部・導入】

後藤：まあ、言うてもね、僕ら、こういう仕事してますけども。やっぱり、いろんなこと挑戦していきたいなと思つてね。

岩尾：そうですね。いろんなことやつていかんと。

後藤：いや、そうですねよ、ほんとに。

岩尾：僕らCMタレントのイメージが強いから。

後藤：出たことないやないかい、おまえ。〈ツッコミ〉

岩尾：あのう、どんだん次のステップにいかんとね。

後藤：いや、おまえ、絶対出られへんよ。CMなんか、おまえ。〈ツッコミ〉

岩尾：うん、ほな、おまえは何がしたいねん。

後藤：俺はね、芸能人らしくね、結婚記者会見いうのをやってみたいなと思って。

岩尾：結婚記者会見。

後藤：そうそう、そうそう。

岩尾：レポーターがばあと来てね。

後藤：ぎょうさん、おるわけですよ。

【主要部・コント】

岩尾：おめでとうございます。後藤さん。

後藤：あつ、どうもありがとうございます。

岩尾：今、その指に光ってるのは。

後藤：ああ、これですか。

岩尾：ニベアですか。

後藤：違うわ。〈ツッコミ〉

コント設定に入って丁寧体のやりとりをしつつ、関西方言の普通体で発せられたツッコミフレーズによって、選択された言語変種に落差が生じ、ツッコミの効果が増幅している。

フットボールアワーは、「SMタクシー」というコント設定のネタも披露しているが、これもタクシー運転手（仮想キャラクター・岩尾）に対して丁寧体で返しつつ、ツッコミのフレーズを最終的に普通体に切り替えている。

(4) フットボールアワー「M-1 グランプリ 2003 決勝最終決戦」(資料 03)

後藤：すんません。東京駅まで行ってくださーい。

岩尾：(女性的な声色で) そんなに東京駅に行きたいのかい？

後藤：えっ？

岩尾：そんなに東京駅に行きたいのかい？

後藤：いや、行きたいですよ。

岩尾：東京駅に行きたい、とお言い。

後藤：言うてますやん。いや、僕、さっきから言うてますやんか。〈ツッコミ〉

岩尾：八王子に行ってやろうか。

後藤：あかんよ。ものすごい遠いがな。〈ツッコミ〉

このネタでは、タクシー運転手の台詞を、女性的な声色を用い、「～のかい?」「～とお言い」といった「女王様キャラ」の口調で表しているが、こうした「役割語」への切り替えも、「本人キャラクター」の関西方言とのギャップによって、より大きな効果を生み出している。

〈関西コンビ〉の「対話型」のネタは、概ね上記と同様の言語変種の選択がなされているが、「本人キャラクター」として関西方言の丁寧体と普通体をスムーズに切り替え、「仮想キャラクター」に扮して共通語（もしくは「役割語」）の丁寧体もしくは普通体を選択し、それによって多様なキャラクターを演じ分けることができるというのは、〈関西コンビ〉の漫才談話の特徴と言えるだろう。

4.2 〈非関西コンビ〉の漫才談話

〈非関西コンビ〉の例として、まず宮崎県出身で大阪拠点のコンビ、とろサーモンの〈主要部〉冒頭部分を見てみる。

(5) とろサーモン「M-1 グランプリ 2017 決勝 1 回戦」(資料 13)

村田：もう、ええ季節ですよ。秋、大好きなんですよ、俺。

久保田：うん。

村田：何するにもいいですよ。もう季節的に秋が一番いい。

久保田：あ、そう。

村田：「あ、そう」じゃないやんか。〈ツッコミ〉

久保田：だって、もう雨降ったら終わりやからな。

村田：何やねん。その極端なやつ。〈ツッコミ〉

いいですよ。趣味やるにもいいしね。もう、いろんなとこ。

久保田：もう、やめよ。季節の話、すんな。めんどくせえ。周りにいません?
 こういう人。春になったら「いいよな。サクラ見行こうか。」秋、「紅葉やな。紅葉行こ。」夏は「泳ぎに行こうや。」冬は「スキー、スノーボード。」雨降ったら終わりですからね。

村田：何があったんや、おまえ。雨の日、何があったの? 〈ツッコミ〉

とろサーモンは、宮崎県の地元の友人同士で結成したコンビであるが、使用している基調方言は語法的には関西方言である（ただし、音調的には宮崎方言の無アクセントが現れる箇所がある）。丁寧体から普通体に切り替えることで、対聴衆発話から対相手発話への切り替えが起きているのは〈関西コンビ〉のネタ運びと同様である。また、ツッコミ発話が普通体で行われるのも〈関西コンビ〉と同様である。

次に、アンタッチャブルの〈開始部〉から〈主要部〉冒頭部分を見てみる。

(6) アンタッチャブル「M-1 グランプリ 2004 決勝 1 回戦」(資料 04)

【開始部】

山崎：どうもありがとうございます。

柴田：お願いします。

【主要部・導入】

山崎：いや、うれしいね。

柴田：うれしいですよ。

山崎：生きててよよかったねえ。

柴田：生きててよよかったです。そのままですよ。

山崎：ああ、小太りでよかったあ。

柴田：いや、それは関係ないんだけど。〈ツッコミ〉

山崎：うれしいです。

【主要部・話題転換】

柴田：ちょっとね。

山崎：はい、はい、はい。

柴田：これもうれしいんですけどね。

山崎：何、何？

柴田：最近、1つうれしいニュースがあったの。

山崎：まじで。

柴田：うん。

山崎：じゃ、後で教えてよ。

柴田：今、聞けよ。何でのつけから後回したよ。〈ツッコミ〉

山崎：M-1 中だよ。

柴田：いやいや、そういうんじゃないんだよ。〈ツッコミ〉

俺の友達がよ。この間、つい最近、結婚したんだよ。

山崎：そんなことないよ。

柴田：あるよ。何でおまえが友達の事実、全面否定すんだよ。〈ツッコミ〉
いや、したんだよ。

山崎：まじで、それありがたいね。

柴田：ありがたいって、おまえのためにしたわけじゃないけど。〈ツッコミ〉

〈関西コンビ〉のネタ運びと同様に、丁寧体の対聴衆発話から普通体の対相手発話への切り替えが起きており、ツッコミ発話が普通体で行われている。特徴的なのは、日常会話的なやりとりに見せながら、ボケ役（山崎）の発言がツッコミ役（柴田）の期待する応答になっておらず、その「かみ合わなさ」が「笑い」につながっていることである。こうした「日常会話性を帯びた会話のかみ合わなさ」は、言語変種としては特色のない共通語の掛け合いだからこそ、その奇妙さが際立つように思われる。

パンクブーブーの〈主要部〉冒頭部分にも、日常会話的なやりとりに見せながら、予想される展開から少しずれたボケ役（佐藤）の発話が見られる。

(7) パンクブーブー「M-1 グランプリ 2009 決勝1 回戦」(資料 09)

佐藤：僕、早く売れてね、引っ越ししたいなと思ってね。

黒瀬：いや、それはいいことですよ、それは、すごく。

佐藤：売れたらね、今みたいな小さなボロアパートじゃなくて、

黒瀬：そう、そう。

佐藤：もっと大きなボロアパートに住めるわけじゃん。

黒瀬：結局、ボロだけだね。〈ツッコミ〉

ツッコミ役（黒瀬）の応答も、強い否定ではなく、普通体ではあるが聴衆向けにボケを補強する発話になっている。これも言語変種としては特色のない共通語のやりとりに紛れ込ませることで、その発想の奇妙さが際立つものになっている。

トレンディエンジェルのツッコミ役（たかし）も、強い否定の表現を使っていない。

(8) トレンディエンジェル「M-1 グランプリ 2015 決勝1 回戦」(資料 14)

たかし：僕、ハロウィンとかあんなやったことないんでね。

斎藤：え？ おまえ、やったことないの？

たかし：はい。

斎藤：おまえ、人生半分損してるぞ、たかし、それ。

たかし：いや、斎藤さん。

斎藤：え？

たかし：もう、うちらハゲてる時点で半分以上損してるから。

斎藤：たかし、全部だよ。

たかし：あ、全部丸々？ そうなんですか。〈ツッコミ〉

このコンビは、年上のボケ役（斎藤）と年下のツッコミ役（たかし）の関係性をネタの中にも持ち込み、ツッコミ役がボケ役に対して丁寧体を使う。共通語のやりとりの中でも、関西方言の「強い」ツッコミとは異なる味わいが生まれている。

次に、サンドウィッチマンの〈開始部〉から〈主要部〉冒頭部分を見てみる。

(9) サンドウィッチマン「M-1 グランプリ 2007 決勝1回戦」（資料07）

【開始部】

伊達：どうもはじめまして、サンドウィッチマンです。よろしくお願いします。

富澤：名前だけでも覚えて帰ってください。

伊達：ほんとうだね。

富澤：ええ。

【主要部・導入】

伊達：世の中、興奮することっていっぱいあるけど、一番興奮するのは、すごい急いでるときにされる街頭アンケートな。

富澤：これは間違いないね。

伊達：うん。

【主要部・コント】

富澤：あの、ダイエット中、すみません。

伊達：してねえよ、別に。ただ、歩いてるだけじゃねえか。〈ツッコミ〉

何だ、おまえは。

このコンビは、共通語の丁寧体とくだけた普通体（関東方言）を使い、対聴衆発話と対相手発話を明確に区別している。くだけた普通体のツッコミは、関西方言の「強い」ツッコミに匹敵する効果を持っているが、このコンビの場合、「本人キャラ

クター」による普通体の掛け合いは〈主要部・導入〉の短いやりとりに限られ、日常会話性を追求するネタ運びにはなっていない。また、(9)に見られる〈主要部・導入〉部分は、このコンビのネタの定型的なやりとりであるが、コント設定に移行するための導入のやりとりとしては、最短なものに切り詰められている。『M-1グランプリ』決勝では、持ち時間が4分間に限られているため、〈主要部〉の「本題」であるコント設定にできるだけ早く移行するために工夫されたものであり、このコンビが優勝したあと、〈開始部〉から即座に〈主要部〉の「本題」に移行するネタ運びをするコンビが増えていくが、それを〈関西コンビ〉ではなく、〈非関西コンビ〉が率先して実践したところに、出身地による漫才観の違いが垣間見られる。日常会話性を重視する〈関西コンビ〉にとっては、会話の自然な流れの中で「本題」に移行することが理想的なネタ運びであったと思われるが、〈非関西コンビ〉にはそのこだわりがなかったのであろう。

最後に2022年大会で優勝したウエストランドの〈開始部〉から〈主要部〉冒頭部分を見てみる。

(10) ウエストランド「M-1グランプリ2022決勝1回戦」(資料18)

【開始部】

井口：どうもー、ウエストランドです。よろしくお願ひします。あー、ありがとうございます。がんばっていきましょう。

【主要部・導入】

河本：いきなりなんですけどね、「あるなしクイズ」ってあるでしょう。

井口：あー、ありましたねー、「お茶にはあるけどコーヒーにはない、赤ちゃんにはあるけど子どもにはない、お城にはあるけどお家にはない。正解はあるほうには全部色が入っている、茶・赤・白。」ありましたね、こういうのね。

河本：そうそう、あれのオリジナルを作ったんですよ。やります？

井口：クイズ得意なんで、ちょっと出してみてもください。

【主要部・クイズ】

河本：まず1個目がね、「アクション映画にはあるけど恋愛映画にはない。」

井口：「アクション映画にはあるけど恋愛映画にはない。」はい、わかりました。

河本：まあまあまあまあ、まだ1個目なんで。

井口：1個目でもわかったから。別にいいでしょ、1個目でわかったんだから。

1個目でもわかったからいいでしょ、別に。

河本：じゃ、じゃあ、どうぞ。

井口：正解は「パターン」。

河本：なんでですか。

井口：アクション映画にはいろんなパターンがあるけど、恋愛映画は全部一緒だから、正解はパターンだろ。

河本：あー、違います。恋愛映画にもパターンはあるんでね。

井口：ないよ。恋愛映画、全部一緒だよ。「さえない女の子がひょんなことから王子様系の男子と知り合い、いい感じになるも、イケイケの女子の恋敵が現れ、そっちに取られそうになるが、結局自分が選ばれた、やったー。」こればかりだろうが！ 全部一緒だから。あとは重い病気になるやつだけ！「感動したなあ。」悲しいだけだよ、あんなの。全部一緒だから。だから正解はパターンだろ！

〈開始部〉は対聴衆発話の丁寧体ではじまり、〈主要部・導入〉の対相方発話も丁寧体で展開している。〈主要部・クイズ〉では出題者の河本は丁寧体を維持しているが、回答者の井口は持論を力説するのに応じて普通体に切り替えていっている。対相方発話の中で、落ち着いたトーンの丁寧体と激しい口調の普通体が切り替わるのは、演者のキャラクター性と感情の動きをわかりやすく示すものとなっている。

このコンビは、本来は河本がボケ役で井口がツッコミ役であるが、このネタにおいては河本が井口をたしなめるツッコミ役を担っている。井口は早口でまくし立てる怒濤の「悪口」が持ち味で、ツービート⁸⁾や爆笑問題⁹⁾に通じる東京系の毒舌漫才の継承者と目されているが、このネタでは「あるなしクイズに回答する」という形を取ることで、「対話型」の掛け合いの中で「悪口」が展開するものとなっている。「ボケ漫談」のツービートや「ツッコミ漫談」の爆笑問題の対聴衆発話による毒舌に比べると、「悪口」が直接観客に向けて発せられるものではない点で、ネタとして「くるまれた」演技方になっているところに新しさがある。

ただし「対話型」の掛け合いとは言っても、ネタの大部分は井口の一人語りであり、発話量は圧倒的に井口のほうが多く、日常会話性を追究する演技方だとは言えない。また、こうした「悪口ネタ」は演者間のことばの掛け合いに依存せず成立するものなので、共通語で展開されることも特に不利には働かない。むしろ、言語変種としては特色のない共通語だからこそ、「悪口」の内容そのものが直接的に伝

わって説得力を持つとも言える。

5. おわりに

1980年代初頭のマンザイブーム期までは、漫才コンビの普段の活動拠点は、大阪の寄席か東京の寄席というように地域的に分かれており、上方系と東京系の漫才の接点はあまりなかった。『M-1グランプリ』も、開催初期は〈関西コンビ〉が多数を占めていたが、近年は〈関西・非関西コンビ〉や〈非関西コンビ〉が増えている。『M-1グランプリ』は、こうした非関西出身者を含むコンビによって、「既存の型」とはわれない新しい「笑い」が生み出される場になっている。

現在、コンテスト形式のネタ番組は、『M-1グランプリ』以外にも『R-1グランプリ』（関西テレビ）、『キングオブコント』（TBSテレビ）、『女芸人No.1決定戦 THE W』（日本テレビ）などがあるが、番組の演者紹介で演者の出身地をあげるのは『M-1グランプリ』だけである¹⁰。漫才は、二人の演者が日常会話の延長で掛け合いをする話芸なので、二人の演者が同じ地域のことばを使っていないと会話のリズムがかみ合わないものになる。その点が、コントや一人芸とは異なる点で、上方系と東京系の漫才が対抗し合うのも、漫才が会話芸であることに由来していると言えるだろう。

付記

本研究の一部は、JSPS 科研費 20H00015 によって行った。

注

- 1) 1980年1月放送の『激突！漫才新幹線』（フジテレビ系）の高視聴率を契機に、1980～1982年にかけて11回にわたり放送された『THE MANZAI』（フジテレビ系）によって牽引されたもので、寄席演芸とは異なるショーアップされた演出により、若者に熱狂的に受け入れられた点で、かつてないブームとなった。
- 2) 2001～2010年および2015年から現在まで毎年1回開催されているコンテスト型のネタ番組。予選を勝ち上がった8～9組と敗者復活の1組の計9～10組（2002～2010・2015・2016年は全9組、2001・2017～2020年は全10組）が決勝のファーストラウンドで4分程度のネタを披露し、審査員の得点順に上位3組（2001年は上位2組）がファイナルラウンドで2本目のネタを披露する。
- 3) 2006年大会出場のザ・プラン9は5人組（当時）のグループなので除いた。

- 4) NSC (吉本興業のタレント養成所) 出身者については、大阪校出身者は大阪拠点とし、それ以外は東京拠点とした。
- 5) ウエストランドの YouTube チャンネル「ぶちラジ」(ラジオ形式のトーク番組) を聞くと、河本氏は岡山方言を使用しており、井口氏も二人の個人的な会話を再現するときには岡山方言に切り替える場面があるが、ネタ中には方言の要素は見られない。
- 6) 南海キャンディーズとスピードワゴンのネタは、日高 (2022) では「対話型」に分類し、「実況類」については本文中で「スピードワゴン、南海キャンディーズのネタの一部にその片鱗が見られる」と説明していたが、ここでは「実況類」をネタに含むコンビを広く取り上げることとする。
- 7) 注6 参照。
- 8) 1972年にコンビ結成。1980年代初頭のマンザイブームを牽引した。ボケ役のたけしは東京都出身、ツッコミ役のきよしは山形県出身。
- 9) 1988年にコンビ結成。ボケ役の太田光は埼玉県出身、ツッコミ役の田中裕二は東京都出身。
- 10) 番組内で流される演者紹介 VTR に出身地の記載があるのは 2001～2003 年大会と 2020～2022 年大会である。第1回から第3回大会にあるので、開催初期から演者の出身地に注目する漫才文化特有の演出があったと言える。

参考文献・URL

- 秋田實 (1975) 『私は漫才作者』 文藝春秋社
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
- 埴宣之 (2019) 『言い訳 関東芸人はなぜ M-1 で勝てないのか』 集英社
- 日高水穂 (2018) 「談話展開からみた〈創生期〉の東西漫才」『国文学』102 関西大学国文学会
- 日高水穂 (2019) 「役割関係からみた〈完成期〉の東西漫才」『国文学』103 関西大学国文学会
- 日高水穂 (2020) 「発話方向からみたマンザイブーム期の東西漫才」『国文学』104 関西大学国文学会
- 日高水穂 (2022) 「談話類型からみた現代漫才—『M-1 グランプリ』決勝ネタの分析—」『国文学』106 関西大学国文学会
- 鐘水兼貴 (2021) 「広がる関西弁～国語研の調査データを使ってみよう～ 「国民の

言語使用と言語意識に関する全国調査」のデータ公開」『ことばの波止場』 Vol.9

<https://kotobaken.jp/digest/09/d-09-04/> (国立国語研究所運営サイト)

M-1 グランプリ公式サイト

<https://www.m-1gp.com/>

YouTube チャンネル「ウエストランド ぶちらじ」

<https://www.youtube.com/@buchiraji>

調査資料

朝日放送テレビ・吉本興業制作 DVD

- 01 『M-1 グランプリ 2001 完全版～そして伝説は始まった～』
- 02 『M-1 グランプリ 2002 完全版～その激闘のすべて～』
- 03 『M-1 グランプリ 2003 完全版～ M-1 戦士の熱き魂～』
- 04 『M-1 グランプリ 2004 完全版～いざ！ M-1 戦国時代～“東京勢の逆襲”～』
- 05 『M-1 グランプリ 2005 完全版 本命なきクリスマス決戦！“新時代の幕開け”』
- 06 『M-1 グランプリ 2006 完全版 史上初！新たな伝説の誕生～完全優勝への道～』
- 07 『M-1 グランプリ 2007 完全版 敗者復活から頂上へ～波乱の完全記録～』
- 08 『M-1 グランプリ 2008 完全版 ストリートから涙の全国制覇 !!』
- 09 『M-1 グランプリ 2009 完全版 100点満点と連覇を超えた9年目の栄光』
- 10 『M-1 グランプリ 2010 完全版～最後の聖戦！無冠の帝王 vs 最強の刺客～』
- 11 『M-1 グランプリ 2015 完全版 5年分の笑撃～地獄からの生還…再び～』
- 12 『M-1 グランプリ 2016 漫才頂上決戦 伝説の死闘！～魂の最終決戦～』
- 13 『M-1 グランプリ 2017 漫才頂上決戦 人生大逆転！～崖っぶちのラストイヤー～』
- 14 『M-1 グランプリ 2018 漫才頂上決戦～若き伏兵はそこにいた～』
- 15 『M-1 グランプリ 2019 漫才頂上決戦～史上最高681点の衝撃～』
- 16 『M-1 グランプリ 2020 漫才頂上決戦～漫才は止まらない！～』
- 17 『M-1 グランプリ 2021 漫才頂上決戦 大漫才時代～人生変えてくれ～』

朝日放送テレビ (ABC テレビ) 2022年12月18日放送

- 18 『M-1 グランプリ 2022』

(ひだか みずほ／本学教授)